

研 究 ノ ー ト

大学生活への意欲と達成が自尊感情に与える影響 —大学1年生に対する縦断調査—

田 澤 実

(法政大学キャリアデザイン学部)

梅 崎 修

(法政大学キャリアデザイン学部)

Effects of Freshmen's Motivation and Achievement in Campus Life on their Self-Esteem

Minoru Tazawa

(Faculty of Life-long Learning and Career Studies, Hosei University)

Osamu Umezaki

(Faculty of Life-long Learning and Career Studies, Hosei University)

Summary

Effects of freshmen's motivation and achievement in campus life on their self-esteem were investigated, and results were discussed from the perspective of their career education.

Questionnaires were distributed among freshmen ($n = 259$) on three occasions: at the beginning of the first semester (April), at the beginning of the second semester (September), and at the end of the second semester (January). Results indicated the following. (1) Attributes such as the process of entering the university and whether the university was the first preference affected self-esteem even in January. (2) Making many friends and developing deep relationships with them in the first semester positively affected self-esteem in January, whereas achieving the same in the second semester did not affect self-esteem.

キーワード：大学1年生、自尊感情、大学生活への意欲と達成

Keywords：freshmen, self-esteem, motivation and achievement in campus life

1. 問題と目的

大学におけるキャリア教育は、新卒学生の就職支援ではなく、大学入学から大学生活も視野に入れ、学生が主体的にキャリアを考え、大学で学ぶことを中心に大学生活を構築していくための支援であることが指摘されている（五十嵐, 2008）。

近年の特徴としては、低学年の大学生も支援の対象となっていることがあげられる。大学の全学的なキャリア支援・キャリア教育担当にアンケートを実施した上西（2006）は7割以上の大学が低学年からの全学的なキャリア支援・キャリア教育について、具体的な職業を早期に定めるよりも、幅広い見識を備え幅広い経験を積ませることが望ましいという方針を持っていることを明らかにしている。実際に、野々村（2001）は、1年次の大学生が達成すべきキャリア発達課題として、①自己の進路適性、大学等への進学目的、入学した学部・学科・課程などを、自己の進路計画に照らして総合的に検討すること、②大学等における生活と勉学の目標について暫定的計画を立てること、③大学生活への適応に務めることをあげている。すなわち、低学年の大学生に対するキャリア教育においては、職業に対する準備よりも、大学生活を有意義に過ごすことが注目されているといえるであろう。

学生が主体的にキャリアを考え、大学生活の中で、幅広い見識を備え、経験を積むには、自分自身に対する肯定的感情を持っていることが望ましいと考えられる。このような肯定的感情については、これまで自尊感情の研究が多くなされてきた。Rosenberg（1965）は、自尊感情には2つの異なる内包的意味があるとし、自分を「とてもよい

(very good)」と考える場合と「これでよい (good enough)」と考える場合とを区別する必要があることを指摘している。前者に含まれる概念は完全性や優越感であるが、後者に含まれるのは、自分なりの満足感である。Rosenberg (1986) は、後者の考え方を示している。このように自尊感情には多様な定義があるが、先行研究では自尊感情の高い者は、学業成績が良い (Hattie, 1992) ことや対人関係のあり方もよい (Griffin & Bartholomew, 1994) ことが示されており、適応の指標と考えられている。

大学新生における大学生活と自尊感情の関係を検討する場合、以下の二つの視点が考えられる。一つ目は入学時において自尊感情が高いために大学生活を積極的に過ごすことができるという視点であり、二つ目は、大学生活を積極的に過ごしたことが自尊感情に影響を与えるという視点である。本研究では、後者の視点に立つことにする。理由は以下の二点である。第一に、青年期は、今まで経験しなかった新しい経験に出会いやすく、自己の未熟さを知って、自尊感情が揺れることが多いと考えられるという指摘 (溝上, 1999) を考慮したためであり、第二に、大学入学時における自尊感情は、高校までのキャリア教育の効果や大学入試結果など、大学生活に入る以前の影響が強いことが考えられ、大学におけるキャリア教育の効果ではないと考えられるためである。大学入学時における自尊感情の高さを規定する要因を検討することも重要であるが、この視点は、大学入学時までの要因によって後の大学生活を説明することになるため、大学に入った様々な大学生を支援するには有益な示唆が見いだせない可能性がある。

大学生活を積極的に過ごしたことが自尊感情に影響を与えるという視点に近いものとして、自尊感情の安定性 (および、自尊感情の揺れ) に着目した研究があげられる。これらの研究では、同一の対象者に複数の時点で自尊感情尺度への回答を依頼し、その得点のばらつき (標準偏差) をもって測定している点の特徴である。我が国の大学生を対象にした研究を取り上げると、自尊感情の安定性 (および、自尊感情の揺れ) は、出来事のとらえ方 (中間・小塩, 2007) や自己概念 (原田, 2005) との関連があることが明らかになっている。特に、原田 (2005) は、自尊感情が揺れることにより、自己概念を見直し、重要な自己概念を形成する契機にもなりうることを指摘している。しかしながら、これらの研究は、概念間の検討が多く、長期的な大学生活と自尊感情の関連という視点では研究が行われていない。大学生活を積極的に過ごしたことが、自尊感情に影響を与えるかどうか検討することは低学年の大学生に対するキャリア教育の理念を実証する意味でも重要であると思われる。

大学生活を積極的に過ごしたことが、自尊感情に影響を与えるかどうか検討するためには、ある一時点だけではなく、複数の時点で調査を行う必要がある。そこで、本研究では、大学生活における達成が自尊感情に与える影響を縦断調査により明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、実際にどのような大学生活を行ったのかという行動レベルの達成のみならず、そもそもそれに対する意欲があるか否かにも注目する。

2. 方 法

調査対象者

東京都内のひとつの四年制大学 (総合大学、私立、共学、学部は文科系) に通う大学1年生 314 名 (男性 137 名、女性 177 名) であった。これらの対象者に社会人試験経路の者は含まれていない。対象者の生まれ年は 1985 ~ 1989 年生まれであった。回答時の年度で 19 ~ 20 歳になる者が 9 割以上を占めていた。ただし、以下に示す 3 時点のデータすべての回答が得られたのは 259 名 (男性 107 名、女性 152 名) であった。

手続き

対象者の学部の必修授業の時間を用いて質問紙調査を行った。

調査時期

2007 年 4 月 (time1)、2007 年 9 月 (time2)、2008 年 1 月 (time3) の 3 時点で行った。

調査用紙の作成

①**大学生生活の意欲と達成**：大学生生活として、「授業」「アルバイト」「サークル活動」「社会」「資格取得」「友人」「イベント」の 7 つのカテゴリーを設けた。これらのカテゴリーについて尋ねる質問項目を独自にそれぞれ 3 項目、合計 21 項目設けた。time1 においては、前期の大学生生活への意欲を、time2 においては、前期の大学生生活の達成と、後期の大学生生活への意欲を、time3 においては後期の大学生生活の達成を尋ねた。大学生生活への意欲については、今後、大学生生活で力を入れてやっていきたいと考えていることを尋ねた (「今後力をいれたいもの」の教示に対して、各項目

であてはまるものに○をつける形式（複数回答可）。大学生活の達成については、同様の項目で実際にできたことを尋ねた（「この半年（1年）でできたこと」の教示に対して、各項目であてはまるものに○をつける形式（複数回答可）。これらの回答を「ある＝1」「ない＝0」の2件法とみなして以下の分析を行った。

②**自尊感情尺度**：山本・松井・山成（1982）が邦訳した Rosenberg（1965）の自尊感情尺度を用いた。この尺度は、「自分に対して肯定的である」などの項目が含まれており、自分に対してこれでよいと感じるような自分自身に対する肯定的感情の程度を測定するとされている。10項目からなり、5件法で評定を求めた。ただし、因子への負荷が極端に低い項目番号8「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた計9項目の合計得点を自尊感情得点とした⁽¹⁾。time3の時点で尋ねた。

③**属性**：入試経路、入学した大学は第一志望であったか否かを尋ねた。

分析方法

本研究における意欲と達成の分析枠組を図1に示す。time1における意欲とtime2における達成をもって前期の大学生活における意欲と達成とした。time2における意欲とtime3における達成をもって後期の大学生活における意欲と達成とした。まず、基礎統計でこれらの意欲と達成を確認する。その後、大学生活の達成がtime3の時点における自尊感情に与える影響を検討することにする。

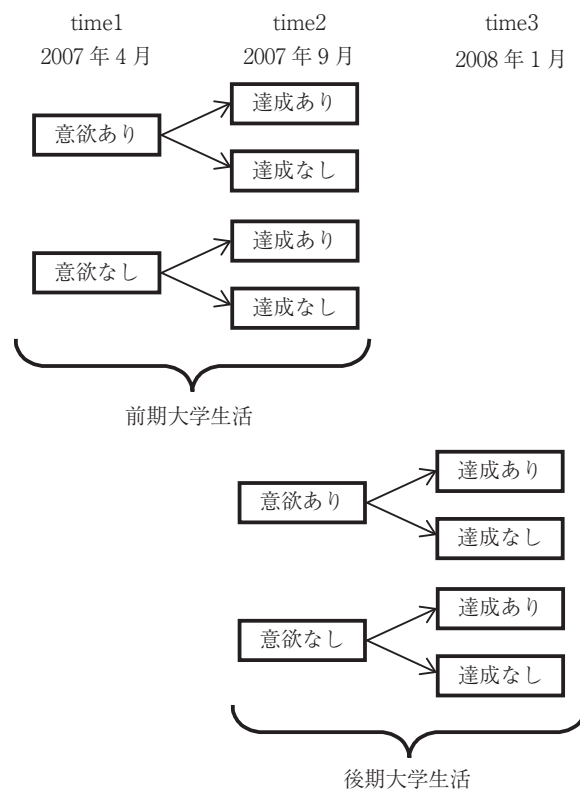


図1 本研究の分析枠組

3. 結果

属性、自尊感情の基本統計

まず、入試経路、第一志望の度数等を表1に示す。一般入試が最も多く、5割以上を占めていた。自己推薦と指定校推薦は合わせて3割程度であり、付属が1割程度であった。現在の大学、学部が第一志望であった者は5割程度であった。

次に、自尊感情得点の平均等を表2に示す。平均は midpoint の 27 を若干上回る 28.55 であった。

大学生生活における意欲と達成

大学生生活の7つカテゴリー 21 項目の平均等を表3に示す。各カテゴリーの3項目の中から、大学生が入学直後に最も力を入れたいと回答した割合が高い項目（time1における大学生生活への意欲が最も高い項目）をそれぞれ1つ抽出し、以下の分析に用いることにした。

「授業」「サークル」「友人」においては、総じて前期の意欲が高いものの、達成ができた者は数割減少していた。また、後期の意欲は前期ほど高くないものの結果的にそれ以上に達成している傾向が見られた。「アルバイト」においては、前期も後期も達成の方が意欲よりも高かった。大学生本人にとってみれば当初思っていたよりもできたと判断していると思われる。「社会」「資格取得」「イベント」においては、前期、後期ともに意欲は高いものの結果的に達成ができた者は半数程度であった。

次に、前期の意欲と達成、後期の意欲と達成の組み合わせごとの度数等を求めた。結果を表4に示す。「授業」「アルバイト」「サークル」「友人」において、最も多い組み合わせは「前期意欲あり、前期達成あり、後期意欲なし、後期達成あり（表中では、○→○→×→○と表記）」であった（19.69～30.89%）。このことは、それぞれにおいて、前期においては意欲があり、実際に達成され、かつ、後期においては、意欲が低下するものの、結果的に達成されて

表1 入試経路、第一志望の度数等

		度数	(%)
入試経路	一般	140	(54.05)
	自己推薦	42	(16.22)
	指定校	43	(16.60)
	スポーツ推薦	2	(0.77)
	付属	32	(12.36)
第一志望である		125	(48.26)
第一志望ではない		134	(51.70)

表2 自尊感情得点の平均等

	平均	標準偏差	最小値	最大値	度数	信頼性係数
自尊感情	28.55	6.91	9	45	259	0.85

表3 大学生生活における意欲と達成の度数等

カテゴリー	項目	前期意欲		前期達成		後期意欲		後期達成	
		度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)	度数	(%)
授業	授業にさばらず出席をする	225	(86.87)	169	(65.25)	125	(48.26)	149	(57.53)
	授業ではきちんとノートをとる	187	(72.20)	147	(56.76)	110	(42.47)	118	(45.56)
	授業では積極的に質問をする	55	(21.24)	10	(3.86)	124	(47.88)	13	(5.02)
アルバイト	いろいろな種類のアルバイトをする	89	(34.36)	37	(14.29)	98	(37.84)	48	(18.53)
	ひとつのアルバイトを継続する	125	(48.26)	142	(54.83)	102	(39.38)	177	(68.34)
	アルバイト先の人の信頼を得る	124	(47.88)	108	(41.70)	113	(43.63)	142	(54.83)
サークル	サークル活動に積極的に取り組む	143	(55.21)	113	(43.63)	120	(46.33)	116	(44.79)
	サークルでまとめ役をする	13	(5.02)	34	(13.13)	79	(30.50)	32	(12.36)
	サークルでたくさんの友人をつくる	196	(75.68)	125	(48.26)	90	(34.75)	130	(50.19)
社会	社会、経済情勢に興味を持つ	181	(69.88)	76	(29.34)	163	(62.93)	79	(30.50)
	政治の動きに気を使う	91	(35.14)	64	(24.71)	162	(62.55)	48	(18.53)
	国際情勢に気を使う	99	(38.22)	42	(16.22)	158	(61.00)	39	(15.06)
資格取得	資格取得のために専門学校、ダブルスクールに通う	16	(6.18)	8	(3.09)	88	(33.98)	11	(4.25)
	自分で取れる資格を調べる	164	(63.32)	51	(19.69)	147	(56.76)	67	(25.87)
	資格取得に向けて一生懸命勉強する	135	(52.12)	25	(9.65)	168	(64.86)	32	(12.36)
友人	友人を大勢つくる	189	(72.97)	134	(51.74)	123	(47.49)	150	(57.92)
	何でも話せる友人をもつ	222	(85.71)	158	(61.00)	102	(39.38)	180	(69.50)
	相談にのってくれる友人をもつ	194	(74.90)	157	(60.62)	93	(35.91)	182	(70.27)
イベント	海外旅行をする	119	(45.95)	22	(8.49)	173	(66.80)	26	(10.04)
	ボランティア活動に参加する	51	(19.69)	22	(8.49)	104	(40.15)	22	(8.49)
	大学の行事に積極的に参加する	161	(62.16)	40	(15.44)	146	(56.37)	65	(25.10)

注) 以降の分析に用いた項目に網掛けを施した。

いる者が多いことを示している。「社会」「資格取得」「イベント」において、最も多い組み合わせは「前期意欲あり、前期達成なし、後期意欲あり、後期達成なし（表中では、○→×→○→×と表記）」であった（27.41～32.05%）。このことは、それぞれにおいて、前期と後期ともに意欲は高いものの、達成するのが難しいことを示している。

大学生生活の達成が自尊感情に与える影響

time3における自尊感情得点を被説明変数とし、属性、前期の大学生生活における達成、後期の大学生生活における達成を説明変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った。結果を表5に示す。

指定校等推薦の者は一般入試の者よりも自尊感情が低く、第一志望以外で入学した者は第一志望で入学した者よりも自尊感情が低かった。1年生の大学生生活が終えようとする1月の時点においても、これらの属性が自尊感情に影響を与えていることが明らかとなった。前期において、サークルでたくさんの友人をつくること、何でも話せる友人をもつことを達成できた者は自尊感情が高かった。後期においては、社会、経済に興味を持つことを達成できた者は自尊感情が高かった。前期のような友人に関するものの影響は見られなかった。

4. 考 察

本研究では、1年生の大学生生活における達成が自尊感情に与える影響を明らかにするために、3時点における縦断調査を行った。その結果、以下の三点が明らかとなった。考察と今後の課題を述べたい。

第一に、入試経路、第一志望か否かという属性は、1年生の大学生生活が終えようとする1月の時点における自尊感情に影響を与えていることが明らかとなった。言い換えると、1年生の大学生生活を通して、これらの属性の影響はなくならなかったということである。浜島（2003）による大学生の意識変容の実証研究によれば、第一志望でなかった者でも、大学生生活を通して、大学への愛着や満足度を示す「肯定変化型」が一定数（19.2%）いたことを示していることから、2年生以降になれば、これらの影響がなくなる可能性がある。しかしながら、本研究では、1年生の大学生生活期間のみを対象としているため、この点は検討できなかった。今後の課題としたい。

第二に、前期において、サークルでたくさんの友人をつくることや、何でも話せる友人をもつことが達成できることは、1年生の大学生生活が終えようとする1月の時点における自尊感情に正の影響を与えていることが明らかとなった。しかしながら、後期において、同様のことが達成できることは自尊感情に影響を与えていなかった。総じて前期の意欲と比較して、後期の意欲が低いという結果も考慮すると、1年生が前期に友人を作ることと、後期に友人を作ることとは質が異なることが考えられる。1年生が友人を作るには時期が重要であるといえるであろう。大学では友人関係の構築も視野に入れて、新入生合宿などのイベントを行うことがあるが、1年の終わりに自分に肯定的な感情を持つことを狙うならば、前期のうちにやったほうが良いといえるかもしれない。

第三に、後期においては、社会、経済に興味を持つことが達成できた者は自尊感情が高いことが明らかになった。前期においては同様のことは見られなかった。後期にのみ影響が見られたのは、大学生生活の慣れや、受けた講義の回数などが影響していると思われる。

溝上（2001）は、大学生にとっての学業は、学業の文脈だけでなく、他の文脈との結合によってひとつの意味を作り上げていると指摘する。本研究では学業の文脈と他の文脈との結合について解釈できるような質問項目を含んでいなかったため、この点については、十分な解釈はできなかった。今後の課題としたい。また、本研究の結果は、ある大学の1つの学部におけるデータを用いている点にも解釈には留意を要する。

上記のようにいくつかの課題が残ったものの、本研究では、低学年における大学生のキャリア教育の観点から、1年生の前期に友人関係を構築することが重要であることを示すことができた。この点は本研究の意義であると思われる。

表4 前期の意欲と達成、後期の意欲と達成の組み合わせごとの度数等

前期意欲	前期達成	後期意欲	後期達成	授業	アルバイト	サークル	社会
				度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
○	○	○	○	38 (14.67)	20 (7.72)	23 (8.88)	13 (5.02)
			×	13 (5.02)	3 (1.16)	6 (2.32)	10 (3.86)
		×	○	79 (30.50)	51 (19.69)	63 (24.32)	26 (10.04)
			×	23 (8.88)	5 (1.93)	17 (6.56)	13 (5.02)
			○	9 (3.47)	19 (7.34)	15 (5.79)	22 (8.49)
	×	○	×	49 (18.92)	11 (4.25)	31 (11.97)	83 (32.05)
			○	7 (2.70)	8 (3.09)	9 (3.47)	3 (1.16)
		×	×	7 (2.70)	8 (3.09)	32 (12.36)	11 (4.25)
			○	4 (1.54)	14 (5.41)	3 (1.16)	1 (0.39)
			×	1 (0.39)	2 (0.77)	0 (0.00)	3 (1.16)
×	○	○	○	10 (3.86)	39 (15.06)	9 (3.47)	5 (1.93)
			×	1 (0.39)	8 (3.09)	4 (1.54)	5 (1.93)
		×	○	1 (0.39)	11 (4.25)	1 (0.39)	5 (1.93)
			×	10 (3.86)	22 (8.49)	11 (4.25)	26 (10.04)
			○	1 (0.39)	15 (5.79)	7 (2.70)	4 (1.54)
	×	○	×	6 (2.32)	23 (8.88)	28 (10.81)	29 (11.20)
			×				
		×	○				
			×				
			×				

前期意欲	前期達成	後期意欲	後期達成	資格取得	友人	イベント
				度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
○	○	○	○	6 (2.32)	38 (14.67)	8 (3.09)
			×	2 (0.77)	7 (2.70)	2 (0.77)
		×	○	17 (6.56)	80 (30.89)	14 (5.41)
			×	13 (5.02)	16 (6.18)	5 (1.93)
			○	19 (7.34)	23 (8.88)	22 (8.49)
	×	○	×	78 (30.12)	23 (8.88)	71 (27.41)
			○	6 (2.32)	20 (7.72)	3 (1.16)
		×	×	23 (8.88)	15 (5.79)	36 (13.90)
			○	3 (1.16)	3 (1.16)	3 (1.16)
			×	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
×	○	○	○	4 (1.54)	10 (3.86)	3 (1.16)
			×	6 (2.32)	4 (1.54)	5 (1.93)
		×	○	7 (2.70)	3 (1.16)	6 (2.32)
			×	32 (12.36)	5 (1.93)	34 (13.13)
			○	5 (1.93)	3 (1.16)	6 (2.32)
	×	○	×	38 (14.67)	9 (3.47)	41 (15.83)
			×			
		×	○			
			×			
			×			

表5 大学生生活の達成が自尊感情に与える影響

説明変数		β
男性		.086
入試経路 (基準：一般入試)	自己推薦ダミー	-.068
	指定校ダミー	-.169 *
	スポーツダミー	.011
	付属ダミー	-.143 *
第一志望以外		-.152 *
前期_授業にさぼらず出席をする		.032
前期_ひとつのアルバイトを継続する		-.037
前期_サークルでたくさんの友人をつくる		.186 *
前期_社会、経済情勢に興味を持つ		.070
前期_自分で取れる資格を調べる		.020
前期_何でも話せる友人をもつ		.185 **
前期_大学の行事に積極的に参加する		.009
後期_授業にさぼらず出席をする		-.099
後期_ひとつのアルバイトを継続する		.079
後期_サークルでたくさんの友人をつくる		.037
後期_社会、経済情勢に興味を持つ		.116 †
後期_自分で取れる資格を調べる		.067
後期_何でも話せる友人をもつ		.100
後期_大学の行事に積極的に参加する		-.063
R ²		.258 ***
サンプル数		259

† p<.10 * p<.05 ** p<.01 *** p<.001

註

(1) 伊藤・小玉 (2005、2006) においても、項目8の負荷量が低いことから、この項目を除いた9項目で自尊感情尺度を構成している。

引用文献

- Griffin, D.W., & Bartholomew, K. (1994). *Models of the self and other : Fundamental dimensions underlying measures of adult attachment. Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 430-445.
- 浜島幸司 (2003). 「大学生生活満足度」武内清 (編著) 『キャンパスライフの今』 玉川大学出版部, 73-89 頁.
- 原田宗忠 (2008). 「青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係」『教育心理学研究』, 56 号, 330-340 頁.
- Hattie, J. (1992). *Self-concept*. Hillsdale, N.J. : L. Earlbaum Associates.
- 五十嵐敦 (2008). 「大学におけるキャリア教育の実践」日本キャリア教育学会 (編) 『キャリア教育概説』 東洋館出版社, 112-115 頁.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 「自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討」『教育心理学研究』 53 (1) 号, 74-85 頁.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2006). 「大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討 : 本来感, 自尊感情ならびにその随伴性に注目して」『教育心理学研究』 54 (2) 号, 222-232.
- 溝上慎一 (1999). 『自己の基礎理論－実証的心理学のパラダイム－』 金子書房.
- 溝上慎一 (2001). 「大学生の自己評価の世界を意味づける学業的文脈」溝上慎一 (編著) 『大学生の自己と生き方 : 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学』 ナカニシヤ出版, 97-137 頁.
- 中間玲子・小塩真司 (2007). 「自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題」『福島大学研究年報』 3 号, 1-10 頁.
- 野々村新 (2001). 「学生相談所を中心にした進路相談」吉田辰雄 (編) 『21 世紀の進路指導辞典』 ブレーン出版, 296-297 頁.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- Rosenberg, M. (1986). Self-concept from middle childhood through adolescence. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the Self*, vol. 3, (pp. 107-136). Hillsdale, New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- 上西充子 (2006). 『大学におけるキャリア支援・キャリア教育に関する調査報告書』 法政大学大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻調査委員会.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』 30 号, 64-68 頁.